

# ろんだん 佐賀



## 岩永 雅也さん

放送大学長

いわなが・まさや 1953年嬉野町生まれ。就学前に千葉転居。筑波大附属高→東京大卒→同大学院修了。大阪大、放送教育開発センターを経て2000年に放送大学教授、21年から放送大学長。専門は教育社会学。チヨウ、馬、自転車、農作業など趣味は雑多。千葉市。

詩人・室生犀星は、「ふるさとは遠きにありて思ふもの」（『小景異情』より）と詠じた。よく知られていくように、この詩は遠方にあって故郷を思い焦がれる歌ではなく、久方ぶりに帰省した詩人を冷たく遇した故郷金沢への屈折した思を詠んだものである。現代口語的には、「やっぱり帰つて来なければよかつたな」と東京へ戻ろう・大好きな故郷だけど・悲しいな」といったところだろうか。たまたま、これは、情緒と感性の世界に生き、それを表現する詩人ならではのナイン感覚であり、大多数の人々にとって、故郷は何よりも大切な帰りたい場所であり温かく迎えられる場所なのだと思う。

## 故郷の来し方行く末

吉田会など、関係する多くのふるさと会があり、毎年例会を開いて活動を続けているということであつた。例会には毎年欠かさずお見えになる嬉野市の村上大祐市長も参加し、他の各県人会、ふるさと会の代表なども見えて参加者も約80人に達し、会はいやが上にも楽しく盛り上がった。

賀」の拙稿を読んでいただきいた在京の嬉野市吉田地区出身の皆さんにお招きいたので、「関東地区ふるさと吉田会」の例会に参加させてもらつた。東京近辺には「佐賀県人会」はもちろん、「関東ふるさと嬉野会」や「関東地区塩田会」、大阪近辺には「関西ふるさと

私は幼少期に生まれ故郷を後にした身であり、それまでどんな形にしろ同郷会のような集まりに出たことはなかった。それに愛郷心というものも、いまひとつ具体的なイメージで持つことができなかつたのだが、幼少期に遊んだため池の周りの風景や祖父母と住

ものだつた。アトラクションの吉田ならではの「皿踊り」にも参加し、女面浮立も一生分堪能し、全員参加のじゃんけん大会では何と最後に一対一の決勝まで勝ち上がり（悔しくも最後に負けたが）、同郷会を心ゆくまで楽しめていた。

う機会をいただいたことに、心より感謝したい。心残りは、佐賀の将来、これからのが郷について十分考えてこられなかつたことであるが、昨今、テレビなどでも日々取り上げられているように、私などが心配するまでもなく、佐賀県は、そして私の嬉野は、結構話題

## 佐賀は遠きにありて…

んでいた生家の周囲の石垣などのスライドを見て胸が詰まる思いをした。「おいは雅也くんとよう遊びよつたあ」とビール片手に話しかけてくれた近隣に住む少し年上のワンパク仲間（もちろん今はいい爺さんだが）にも会え、「ああ、故郷を想うというのはこういうことなのか」と得心した

さて、この「ろんだん佐賀」の私の担当も今回が最後となつた。これまでの8回、その時々のテーマに触れながら、個人的エピソードも交えて何とか書き継がせていただいた。長かつたいないと感じる。「薩長土肥」の「肥」も、皆が「それは佐賀でしょう」と理解してくれる日もそう遠くないうち。ともあれ、今回の一連の連載で、遠く離れた故郷佐賀にあらためて向き合つたと心底思つている。

